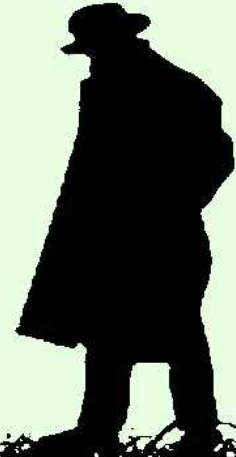


セナードつうしん

第10号 (増補版) 2025年3月

仙台・羅須地人協会



第10号をお届けします。みなさまのご協力、ご理解によってようやく二ケタの号までたどり着くことができました。今回は2025年という「年」にフォーカスした手稿を掲載します。「仙台・羅須地人協会」としては、何よりも協会の創設者大内秀明元代表の一周忌の「年」ということを外すことはできませんが、戦後80年、昭和100年という区切りを念頭に筆をとっていただきました。物理的な時間の流れに意味を持たせるということになります。各執筆者の視点が多様であることを味わっていただければと思います。

私にとっての2025年

平山 昇

私はこの春で76歳になる。数え年で言えば喜寿である。11年前に大内秀明先生との共著で、『土着社会主義の水脈を求めて一労農派と宇野弘藏』(社会評論社2014)という本を出したわけだが、私にとっては自分でやった組版も含めてたいへん未熟な本で、いつか書き直さねばと思いつつ、その間に大内先生はご自分が書かれた部分の続編を、『日本におけるコミュニタリアニズムと宇野弘藏』(同2020)と『蘇るマルクス』(同2022)にまとめられた。

その間に私も自分の続編を書きあげて大内先生にお見せしたかったところであったが、それが出来ないままに大内先生は亡くなられてしまった。本はそれなりに読みつづけているのだが、70

歳代半ばともなれば、記憶力も頭の回転も日々悪くなり、ここ数年来もうこのまま何も書けずに人生を終わるのかの悲観と強迫観念に追われる日々ながら、一方私はもともと研究者ではなくて社会運動志向で、マルクスよりもオーエンやブルードン系であったから、大学をやめて以来、協同組合(生協)で働きながら労働組合と労働者政党(日本社会党)の活動をやってきたのは、資本主義の成立＝ロッチデール型消費生協と労働組合と労働者政党に3分割されてしまったロバート・オーエンの「空想的社会主義」の再一体化を構想してきたわけで、そのためにこの間、生産協同組合としてのアソシエーションだるま舎と労働組合としてのプレカリアートユニオン、労働者政党としての立憲民主党のパートナーズ運動を自分としては一体化させてやってきたわけで、レーニン流に言えば、本を書くよりも社会運動の方がおもしろく、世界的な大変革がすすみつつある中、ますますそればかりの日々になっているわけである。

しかし運動には体力が必要で、高齢化は日々

それを減じているから、そこでの体験もふくめて、やはりどこかでまとめねばというのが現在で、喜寿はその指標であろうかと思う。昨夏に、知り合いから同人雑誌に誘われた。文芸誌であるわけだが、趣味と気分転換に「島崎藤村と柳田国男」という文芸評論を少し書いてみた。内容的には「晩期マルクス論」ならぬ、「晩期藤村論」で、島崎藤村は自然主義で私小説だと批判されるわけだが、フランスからの帰国後に書きだした『夜明け前』から未完の『東方の門』などを読めば、それは反近代小説である。この辺りから始めるところです。

私にとっての2025年

加藤 益子

今年、昭和100年。私は昭和17年生まれで83才になります。考えてみるとずいぶん長生きしたことになりますね。私は満州生まれで、3才で終戦を迎え日本に引き揚げてきました。

父が満州国の管理をしていたので、終戦直後長春からすぐ貨車に乗って無事に引き揚げられたのは本当にしあわせなことでした。両親は大変なこともあったかもしれませんが、3才の私の記憶の中には大変な思い出はひとつもありません。

ただ覚えていることは、日本が戦争に負けたと分かったとたん中国の子供たちでさえ私達親子におもちのピストルをむけたこと。ロシア兵が我が家のドアをけとばして入ってきたこと。その時1才の弟がバカヤロウ！ってどなったんです。そしてそのロシア兵が何もせずに出て行ったこと。その時のことは未だに信じられません。どうして赤ちゃんの弟がどなることができたのか。なぜロシア兵がなにもせずに出て行ったのか。

夜になると窓から灯りがもれないように畳みを窓に立てかけ、いつでもにげられるように着のみ着のまま夜をすごしたことも覚えています。外で

は銃の弾の飛ぶ音がヒュー、ヒューと聞こえていて、今でもその音が耳にこびりついてはなれません。真つくらな貨車につめこまれて、でもその貨車に乗れたことはしあわせなことだったのです。そして一番早い船に乗ることができて九州の佐世保に上陸できたのです。その時のみかん山のきれいだったこと。一生忘れることはできません。

そのあと父の実家のある岩手の山奥に住むことになったのですが、ゆたかな自然に囲まれての生活はともしあわせだったと思います。その頃は物資にめぐまれず、学校の教材も数がそろわず、クレヨン一つをみてもジャンケンして何人かの生徒がもらえるような世の中でした。

物のありがたみがわかる世の中でしたね。今の若者たちに「足るを知る」という言葉を大切にしてほしいと思います。

私にとっての2025年

若生 和子

2月20日(木)のNHKテレビ番組・列島ニュースで、「月」で魚を養殖して「地球」を見ながらお刺身を食べたい、いつかそうなりたいと「そのような夢を持っている研究者」がいる、というニュースを見ました。楽しいものでした。

また一方で、米国大統領トランプさんは世界を驚かせるような発言をしており、びっくりさせられます。

先日、町内の(シニアグループ)趣味の会に出席しました。そこで仙台市出身の詩人であり、童謡を数多く発表された「スズキ ヘキ」さんの娘さんとお会いしました。早速仙台文学館へ行き、常設展示室のスズキ ヘキさんの作品と対面して来ました。人の縁とはなんと不思議なものでしょう。私は「タンポポヤマ」の唄が大好きになりました。

「タンポポヤマ」 スズキ ヘキ
タンポポヤマデ

キツネガ オヒンネ
シテタトサ
タンポポヤマノ
ヒガラカサ サシテ
ネテタトサ
タンポポヤマデ
キツネガ ユメヲミテタトサ
タンポポヤマハ
ソノママ ベンカタニ
ナツタトサ

素朴であり、あたたかい気持ちにさせられます。家事をしながら、いつの間にか口ずさんでいます。

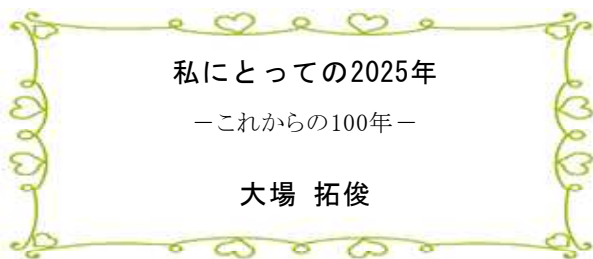
宮沢賢治さま

私の近況の気持ちを託してみました。大変御無礼を致して申し訳ございません。

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
米国の関税ニモマケズ
物価高騰ニモマケズ
高齢ニモマケズ
丈夫ナカラダト
強イ心ヲモツ人ニ
ワタシハナリタイ

宮沢賢治さま

ヨロシク オネガイ モウシアゲマス。



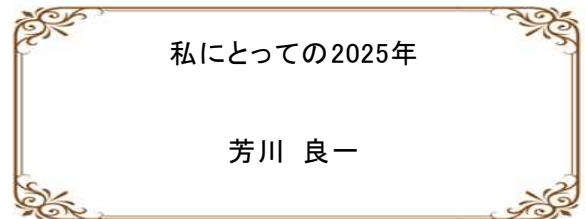
人生100年時代と呼ばれて、100年前とこれからの100年を予想する。

100年前1925年(大正14年)、作陶家・河合寛次郎と作陶家・濱田庄司と宗教哲学者・柳宗悦が木喰彫刻調査のため紀州を旅行中、「民藝」の造語を作った年だ。名も無い工人が作った道具、そし

て愛用し続けた民衆、民衆的工芸に美を見い出した。これが工芸運動・文化運動として100年続いている。これに多くの知識人が共鳴しておった。50年前に訪れた東北大学植物学者の自宅に河合寛次郎の独創的な花瓶があった。

民芸運動草創期に進歩的知識人の流れの一つとして志賀直哉らと共に柳が文芸美術雑誌「白樺」に加わっている。その一方の一つが社会主義運動であったのだろう。現代史においてこれら諸運動がなければ日本はどのような現代社会になっていたのか？ これらの運動の役割は絶えたのか？ 現代が抱える諸課題を再解釈して再生するのか？ 民衆が過去100年を振り返り、求めるモノがあれば再生するであろう。

100年後の2125年はどのような社会、世界なのか。白樺派の人々は近代日本の幾度の戦争に対して平和を願っておった。これから100年も平和であって欲しいものだ。



今回のテーマは、自分の人生をふっと振り返る良いきっかけになりそうです。

私は1950年生まれです。非常に区切りのいい、覚えやすい年号と言えます。遮二無二走り回った企業を定年退職したのが2010年、還暦でした。2020年に古稀。2025年は後期高齢者の仲間入りです。

何故2010年から書き出すかという、それ以前に生きていなかったかということではけっしてないのですが、ほんとに自分の人生を始めたのはひょっとして退職後かなと思えたからです。

そう思う理由は三つあります。

まず一つめとして、長年住み慣れた東京を離れ生まれ故郷の三本木(大崎市)に戻り、そこで一脈相通じる人との出会いがありました(幼いころか

ら知ってはいたが、交流はなかった)。導かれるままに農のまねごとをはじめ、作物を育て、収穫し、食することの喜びを知り、反面思いもよらぬ自然の過酷な力にオロオロもしました。昂じてついに六十路過ぎにして山登りも始めました。

そして二つめです。退職後は「怖いものは何もない」という心境の中、それまで意識・無意識的に抑えつけていた想いを社会活動というかたちで発現できていることです。遅れて参加したというひげ目を持ちながらも、身の丈で、反原発と放射能問題に取り組み、また自然保護活動に参加しています。それらは鬱屈した想いを解放する場をも与えてくれます。住民訴訟にも関わりました。裁判所での原告本人尋問に立った時の緊張と落胆はいまだに鮮明な記憶になって甦ります。

最後に三つめです。それは、仙台羅須地人協会との出会いです。これは知的刺激という面でおおいに有難い思いでおります。大内先生と直接お会いできたことは隠れ宇野派の私にとって強烈な印象でした。その大内先生は勿論、諸先生方の長年の研究の蓄積を生で感じ取れる場は他にありません。また、仙台羅須地人協会を通して数々の得難い方々との交流が生まれたこともとても大事なことです。

こうして退職後の15年を振り返ると、この15年こそが私の人生といってもいいような気がします。すくなくとも、学生時代の鬱々や本心違背の企業生活と、どうやら次元を異にした生き方をしているのではないかとポジティブに捉えられそうなのです。

後期高齢者入り後のこれからですが、もはや何かに突然開眼することもないでしょうから、年齢と体力と相談しながら、今のスタイルを一日一日生き続けたいと思っています。

人生の仮総括のチャンスとなるテーマを与えてくれた事務局にあらためて感謝します。

「わたしにとっての2025年」

—2025年に思うこと—

石黒 康二

今年が5年に1回の国勢調査の年である。日本で国勢調査が始まったのが100年前の1925年である。この年にはラジオ放送も始まっている。また、満25歳以上の男子に投票権が与えられるようになった普通選挙法が、そして治安維持法が制定されている。

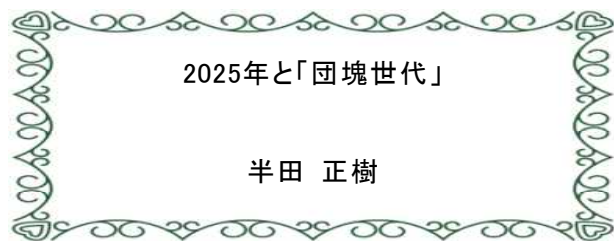
それ以降の100年間。太平洋戦争の開始、終結、生活危機の戦後、高度成長期、バブル崩壊、「失われた30年」等とさまざまなことがあり、私自身はその中の82年間を経験してきたことになる。ラジオからテレビ、タイヤから電気洗濯機、リヤカーから自動車、スマホの普及などなど私たちの生活スタイルも変わってきた。

100年後はどんな社会、日本、世界になっているのか？食べるもの、着るものはそんなに変わらないだろう。コメ、麦を食べ、ジャガイモやサツマイモ、キウリ、ナス、トマトあるいはリンゴ、ミカンなどを食べているのだろう。暑さ、寒さをしのがねばならないので下着や上着を季節に応じて着用する洋服主流の今のスタイルは大きく変わらないだろう。住まいも基本的には変わらないが、より快適な住まい方を求めて密閉性や換気性が強化されるのだろう。クルマ等の移動手段やスマホ等の通話・通信手段はどのようになっているか？事故のない、環境にやさしい方向に進んでいることを期待したい。今の少子高齢社会や介護人材不足を賢くクリアしつつ、より豊かにゆとりある暮らしをしていると信じていたい。

もっとも気がかりなのがウクライナ戦争の終結のあり方やイスラエルのガザ殲滅の今後などである。今年も日本政府は「被団協」等々の求めに応じず、国連の核兵器禁止条約国会議へのオブザ

ーバー参加を見送った。核兵器保有、使用の禁止は人類の声であろう。朝鮮戦争の休戦状態がいまだに続いているのもおかしい。100年後もアメリカ軍は日本に駐留し続けているのだろうか？世界の国々の意思が国連総会で示されるが、その大多数の意思が大国の拒否権などで否定される現実を変えていかねばならない。

国連のユニセフや難民支援、食糧危機対応の組織などがつくられてきている。人間の、人類の共通の意思と知恵で平和に人々が共存している100年後であってほしいと願うものである。「人間ファースト」、「地球ファースト」が100年後の世界の常識になってほしい。



2025年と「団塊世代」

半田 正樹

2025年を迎えて2ヶ月が過ぎた。学年単位でいえばこの3月末日をもって「団塊世代」全員が後期高齢者となる。社会保障絡みのいわゆる「2025年問題」が話題となるが、ここではわたしなりの視点から「団塊世代」の2025年をとりあげてみたい。わたしもこの世代の一人だからである。

「団塊」が人口に膾炙する契機となったのは、堺屋太一の小説『団塊の世代』（1976年刊）である。通産官僚の堺屋が鉱山石炭局にいた関係で"nodule"という鉱物学の用語に出会ったこと、他方で厚生省の役人から「戦後間もなく生まれたすさまじい数の年代がゆくゆく日本の荷物となる問題」を聞かされていたことが背景にあったといわれる。"nodule"は「団塊」と訳されるが、堺屋はそれを「巨大な人口のかたまり」にあてはめたのであった。

そこで、興味を惹かれるのが、「nodule」という鉱物学用語が「堆積岩中に周囲と成分の異なる物質が固まっている部分」を意味するという点である。堺屋は、「団塊」をもつばら「人口の大きな塊」

すなわち量としてとらえたが、実は「その大きな塊」が帯びる質こそが問われるべきではないかと思われるからだ。

戦後まもなく生を享けた「団塊世代」の来し方は、戦後80年とおよそ軌を一にする。敗戦からの再起動のプロセスとほぼ重なり、なるほど焼け跡・闇市は体験していないが、貧しさのなかから辿った暮らしの記憶はけっこう鮮明だ。台所の土間にかまどがあり、薪でご飯を炊き、すりこぎやすり鉢が生活のなかで生きていた。大きな盥と洗濯板。風呂は薪で沸かし、のちに亜炭・豆炭にかわった。庭には玉子を恵んでくれるニワトリがいて、小さな畑には父と一緒に厠から"肥し"を運んだ。

進駐軍のMP (Military Police) が"パンパン"と呼ばれた日本女性と腕を組んで街に行く日常があった。市電が一年に一回のハレの日に、花電車となって登場し、バスはボンネットバスで、最もふるい記憶のなかでは木炭で動くそれが走っている。市電にもバスにも車掌がおり、乗ると切符にパチンとハサミを入れてくれた。

小学校、中学校では、年長や年少の学年との違いは明らかで、教室は1クラス60人に迫ることもたちで溢れていた。塾はなく家庭教師をつけることももごく限られていたから、放課後は空き地に群れ集い、暗くなるまで跳びまわった。三角ベースの野球や草地に円を描いた相撲を愉しみ、陣地取りゲームや町内を目いっぱい使った長距離リレー競走とでもいうべき遊びに日々心を躍らせた。時には崖の上で唄をうたい、芝居の真似事にも興じた。

遊びの仲間はずべて「団塊世代」で間に合い、不足することはなかった。すべての遊び事は、自分たちが決定権をもち、自分たちのルール(掟)によって行われた。おとなの干渉は一切なかったし、口を挟まれないようにするだけの知恵があった。

こうしたことは、知らず知らずのうちにいわゆる「中間組織」の道理を身に着けることにつながっ

たように思う。「団塊世代」の一部が少し長じて、いわゆる「全共闘」という当時の新しい運動体(中間組織)に関わったことも至極当然だったのかも知れない。

こうして「団塊世代」を語りだせばきりが無いが、「周囲と成分の異なる物質が固まっている部分」に通ずるといのが特徴だったのはまちがいない。それは「自立性」と言いたいところだが、「独り善がり」の言い間違えでは、とのそしりを受ける覚悟はできている。

ともあれ戦後80年とほぼ軌を一にしてきた「団塊世代」だが、同じく第二次世界大戦後すぐに生を享けたアメリカの「団塊世代=Baby Boomer」は、朝鮮戦争やベトナム戦争など戦火の絶えない日常とともに育ち、現在に至っている。その苦悶はいかばかりであったろう。それに対して、この国における「団塊世代」がそうした悩ましきから「自由」であったのは、「団塊世代」の誕生(1947年)とともに発効した「日本国憲法」が変わらずにあったからである。これを決して忘れてはなるまい。

「団塊世代」全員が「後期高齢者」となる2025年。「世代」の終点が見えてきたなかで若い世代に向け、彼らが嫌う「塊であること」はそう悪いことではないと伝えたいと思う。

ところで地質学・鉱物学に精通していた宮沢賢治は、「団塊(nodule)」を知っていたのだろうか。

座標軸を再考する年にしたい

末永 茂

そろそろ周辺のガラクタを片付けておかないと次世代に迷惑をかけることになるだろうな、との思いも日増しに強まっている。生物としての限界は否応なくやってくるから、今年を終活のスタートにしなければならない歳である。1960年代央から誰に強制された訳でも、強烈に感化・指導されたこともなくマルクス経済学=宇野理論を学ぶように

なった。その意味する所を省察するに当って、仙台での集まりは良い機会になった。特に、数回の報告の際は内秀明氏の感想も頂きそれなりに得られるものがあった。氏の言葉はこんなものだったのではないか。つまり「ソ連は生産第一主義で環境問題などにはお構いなし。工場廃水は垂れ流しで、あれは酷い」「国際共産主義運動はドグマだった」「経済計算論争はほぼ決着はついている。『価値論の形成』を読み返すと問題があるな」等々のようなことを、独り言のように語ったのが印象的だった。やはり一つの学説なり論考が超歴史的に何の修正もなく、そのまま存続することは有り得ない、ということ強く認識することができた。

「創造的マルクス主義」という観念に惚れ込んで、「科学的に読む」という言説に惚れ込んで宇野理論を学ぶことになったが、ようやく全体としてそのイデオロギーの根幹に関わる限界のようなものを感じている。DNAを受け継ぐとは、何れそこから転換するのが成長というものではないだろうか。あくまで「発展」ではなく「成長」であり、最終的には消滅するという意味をも含んでいる。無理々々、訓詁学的にお経を読んでも弊害しか生まれない訳だから、それを認識した上で、一つの古典的文献として一書を読むことは意義深い。

ソ連崩壊によって社会主義思想やマルクス主義の退潮と消滅は否応なく進展してきた。一方で、ケインズ経済学や新古典派経済学も経済学界ではその信認が揺らいでいる。相互に対抗機軸を失った結果の現象である。世界は一つなのに、相互にかつ建設的に組み込むことができないでいる。そして、経済学が経営学の一領域やビジネス学、実学の台頭の陰でなす術を失っている。恐竜は絶滅したが、化石は残している。それが我々人類史理解のイメージーションを刺激している。そんな価値は大いに歓迎すべきではないか。そして確かな「現状分析」によって経済学を蘇生したいものである。目先のことより長い時間

軸を考える年にできれば幸いである。

昭和百年の夢

田中 史郎

本年は、戦後80年であり、また昭和100年でもある。調べていたら、「朝日新聞」で戦後間もない1948年の元旦から、「昭和百年の夢」と題した連載のあることを発見。その第1回は人口問題であった。引用しよう。

「戦後の3カ年を経た日本は、いまようやく深い谷あい抜け出して、広い明るい空を仰ごうとしている。希望のみちは昭和百年へ――戦後はもうはじまっている。そして"昭和百年の夢"もそんなに遠い先ではない。／しかし四つの島に8千万近い人口がひしめき合っているのは夢も浮かぶまい。そのころ日本の人口は一体どうなっているのか？

／日本の人口は昭和40年ころまでは上昇線をたどって増加し、8千700万程度までふえるが、それから減りはじめ昭和百年には5千万程度に落ちつく計算になる。／適正人口は5千万と踏むのが無理のないところ、5千万人なら理想の園も作れよう。」（「朝日新聞」1948年1月1日）

ここから、幾つかのことが思い浮かぶ。その第1は、この連載の第1回が人口問題だったという意味だ。ある社会や国家の長期を展望するには、やはり何よりも人口が課題となるのは、T.R.マルサスを引き合いに出すまでもない。第2は、当時は復員兵や引揚者の増加による食糧問題や雇用問題が焦眉の課題であった点だ。それに加えベビーブームも重なり、人口問題は避けられない課題だと考えられたのであろう。さらに第3は、より踏み込んで、「適正人口」なるものが示されていることだ。人口は、しばらくは増大するものの、「適正人口」に収斂し、それが5千万人だとされている。これが予想であるとともに目標とされたわけだ。

では、昭和100年の現在はどうか。いうまでもな

く想定は外れ、当時では予想もつかない人口増加が現実のものとなった。8千万人の人口に対しても「ひしめき合っている」と表現していた当時からみると1億3千万人に近い昨今の日本社会はどのように映るであろうか。また、このところ少子化が叫ばれ人口減少が懸念されているが、こうした点もどのように見えるのであろうか。

人口が遙かに少ない時代に人口爆発が懸念され、人口が多い今日で人口減少が危惧されている。あまりにチグハグた。実はこうした見通しや錯誤こそが、まさに危機ではなかろうか。人口問題にかんしては、何よりも沈着に、そして想定外の事態に対してもそれを所与とした認識と政策が求められることはいうまでもない。

2025年を迎えて

—「賢治の回心」考(上)—

明石 嘉夫

賢治の回心

宮沢賢治の作品には詩でも童話でも読者の心を揺さぶるものがある。どの作品を読んでも賢治の描く世界に魅了されてしまう。童話もすべての作品がいわゆる法華文学だというものではないが賢治の作品の根底には宗教的なものに裏付けられているように思われる。

賢治が熱心な法華経の信者であることを考えれば作品のあちこちに法華経の教えが散りばめられていることは当然のことだと思う。

宮沢賢治は詩人であり、童話作家であり、法華経の行者であり、農業技師であり、教師であり、農民の友などの様々な顔を持った人であった。どれが本当の賢治なのか容易には断定することができない。

宮沢賢治の生涯で特筆されることはなによりも法華経という菩薩行の実践をおこなったことである。それは賢治が亡くなる前日に病苦をおして長

時間農民の肥料相談に応じたとの逸話にも見られる。

宮沢賢治は十八歳の時に『漢和対照妙法蓮華經』を読んで身の震えるほど感動して法華經に回心したとのことである。それまで熱心な浄土真宗の信者だった賢治がなぜ法華經に回心したのか考えてみたい。

浄土真宗から法華經の信者へ

宮沢賢治の父政次郎は熱心な浄土真宗の信者であった。宮沢賢治年表によると政次郎は地元花巻の大沢温泉で浄土真宗の夏期仏教講習会を主催するなどしていた。賢治が九歳の時の第八回夏期仏教講習会「我信会講話」には父政次郎とともに参加し、講師の暁鳥敏の待童をつとめたという。また幼児の頃家では伯母のヤギが親鸞の「正信偈」や蓮如の「白骨の御文章」を聞かせ、賢治も暗唱して唱えたという。また十六歳の時には父政次郎に「小生はすでに道を得候。歎異抄の第一頁を以って小生の全信仰といたし候。…念仏も唱え居り候。仏の御前には命をも落とすべき準備充分に候」などという手紙を書き送っている。

このように浄土真宗の熱心な信者であった賢治だが十八歳の時に島地大等虔修の『漢和対照妙法蓮華經』を読んで身が震えるほどの感動を覚えたという。なかでも如来寿量品十六に深く感銘したということである。これを読んで賢治は世界観が一変したという。

法華經の世界観とは

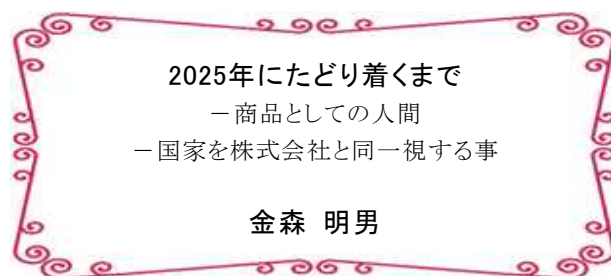
宮沢賢治が感動した『法華經』如来寿量品十六には何が書かれているのか。菅野博史著『法華經入門』によると「八十歳での釈尊の涅槃を『法華經』は久遠の釈尊が「方便」によって涅槃を現ずるとして解釈した。つまり永遠の生命をもつ釈尊が衆生を救済する巧みな手段(方便)として仮に涅槃に入る姿を示す思想である」という。そしてポイントは、①釈尊の命が永遠であるということ、②釈尊が涅槃に入るのは方便であること、③信仰

のある者は釈尊を見ることができることだという。

如来寿量品十六において釈尊は「良医病子」の譬喩で涅槃に入るのは方便であるという思想を示している。賢治はこの譬喩にいつそう感動し、自分自身を良医から治療を受ける子どもに重ね合わせたという。

丹野昭義著『宗教詩人宮沢賢治』によれば『法華經』独自の仏は「如来寿量品」に説かれている「久遠実成の本仏」である。『法華經』の仏は釈尊である。賢治はまさに久遠実成、換言すれば永遠の生命の仏とその仏の生死を通してこの世界が浄土であるという思想に感動したのではなからうか。これが賢治の『法華經』信仰の原風景であろう」という。

(次号に「下」を掲載します。編集係)



『ヨハネの黙示録』に次の様な一節があります。

「その商品とは、金、銀…奴隷、人間である。」[18:12~13]新共同訳

商品の最初の項目が金ですが、最後の項目が人間です！ それも、一つ手前の商品が奴隷です！！

ここから、見えてくる事があります。

ひとつ、奴隷が、商品としての人間が、経済活動に組み入れられています。すなわち、政治体制は不可欠な要素として活用する事で、成り立っている。

ひとつ、無条件で、奴隷制を肯定します。

ひとつ、とすれば、必然的に社会を二分する。奴隷及び商品としての人間と、それらを利用する人間とに区別し、差別します。

ひとつ、力関係即ち、力に依る統治構造を持ち

込みます。

ひとつ、ここには、平等で自由な社会は完璧にありません。

ひとつ、平等・自由を前提にしなければ、法の基での平等も無いのだから、倫理規範なども成立しない。

ひとつ、平等が無い社会にも倫理規範はあるのですが、それは一方の押し付けです。

ひとつ、ですから、倫理規範は常に無効化される方向に向かいます。

ひとつ、この状況は、一見、両者に都合よく見えます。利用される側は、不服従の意志表明ですし、利用する側は恣意的に行動出来ます。

ひとつ、しかし、この様な力関係のみを基準にするのでは、利用する側からの、権力者・支配者の側からの現状肯定にしかありません。

ひとつ、本質的に物事を変える事はありません。

ひとつ、自らの宗教をこの様に、自らが規定しているのです。

別な側面もあります。

「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。

男と女に創造された。』『創世記』[01:27]

との事だそうだけれども、その人間が商品なのですから、とすれば、「神」が、元々、商品なのでしょう？なぜなら、神は「天地万物は完成された。』『創世記』[02:01]

と、万物を創造したのでしょうかから、地上の商品より以前に存在していたはずですから、最初の商品です？？？

とすれば、欲望により全てを商品にすると考えるのは、確かにその通りに思えるのですが、欲望とするのは、単なる付け足しで、創造する時点で商品なのだから、後は時間の問題で、必要とする時に、登場するのでしょうか。

これらの思考方法の延長線上に植民地政策があり、さらには資本主義経済体制が登場します。

だけれども、これでは、否定の対象にしかありません。

【お詫び】

まず、お詫びをしなければなりません。本号を、金森明男氏の論考を掲載せずに発刊するというミスをしてしまいました。というのは、締切日の昼頃に全ての投稿があったものと早合点し、その時点で入稿された原稿を基に編集作業に入りました。本来ならば、締切日の翌日をもって作業を開始すべきところを、フライングをしてしまったわけです。氏および全ての会員読者にお詫びを申しあげます。

つきましては、ここに「第10号(増補版)」として、改めて発行したいと思います。

センタードつうしん 第10号 2025年3月

Art is man's expression of his joy in labour.

仙台・羅須地人協会

〒980-0811 仙台市青葉区一番町 2-5-12

一番町中央ビル 8階 「シニアネット仙台」内

HP <https://rasuchijin.jpn.org/>

Tel 022-266-5650 FAX 022-266-5662

Mail rasuchijin-office@rasuchijin.jpn.org

